

20150131 東北食農研究会／第7回ミーティング議事録

「ふゆみずたんぼ」が人と自然をつなげる

～大崎市蕪栗沼の農家の取組みと企業との連携～

日 時：2015年1月31日（土）17:15－18:45

場 所：仙台市／青葉区中央市民センター

発表者：高橋直樹さん（伸萌ふゆみずたんぼ生産組合）

参加者：参加者 11人（発表者除く）

（会社経営者、会社員、ライター、通訳翻訳、地方議員、公務員、NPO法人理事長、
行政書士・司法書士など）

目次：

1. 蕪栗沼とマガン
2. ふゆみずたんぼ導入及び技術確立のきっかけ
3. 企業との連携など
4. まとめ

発表： ～自然環境を守るだけでなく、かしこく活用しましょう～

1. 蕪栗沼とマガン

伸萌ふゆみずたんぼ組合は10人の農家と1人の非農家で構成されています。有機栽培米の出荷調整のほか、ふゆみずたんぼ（冬期湛水）作業、水田生きもの調査などを行っています。

蕪栗沼と周辺水田は湿地・湿田です。マガンの群れが飛来します。日本に飛来するマガンの80%（約18万羽）が大崎市周辺にいます。マガンは昔なら日本のどこにでもいた渡り鳥です。しかし、1960年ぐらいから急速に減少しました。狩猟の影響です。その後、天然記念物に指定され、個体数は回復してきました。が、飛来地は一極集中になっています。宮城県の大崎市周辺と新潟県の一部にほとんどが飛来します。たんぼとねぐらがセットになっている必要がありますが、水田の整備で湿地・湿田が減ったことが原因です。

一極集中化によるガン類保全上の課題が生じていました。まずは感染症被害のリスクです。絶滅の可能性があります。また、エサの不足から農業被害のリスクもあります。人が大きか鳥が大きかで地域内での対立がありました。農家にすれば渡り鳥は害鳥となってしまいます。農家は農業用水を引くのを容易にするために蕪栗沼を深く掘ろうとします。しかし、マガンは浅くないとねぐらとして使えません。また、ここにしかない光景を守ることは資源になるという考えもある一方、遊水地による住民の安全が大切という考えもありました。このため、ラムサール条約どころか、県鳥獣保護区の指定もままならない状況でした。

2. ふゆみずたんぼ導入及び技術確立のきっかけ

いまある資源を農業とミックスさせて、お米を販売していくというストーリーが見えてきま

した。とはいえ当初は、農家に相手にされませんでした。きっかけは平成15年の冷害です。蕪栗沼と周辺水田では一反4俵しかとれない状況になりました。そのとき、隣の町に住むある農家の田んぼでは、稲がたわわに実っていました。理由を尋ねると、冬の田んぼの水に張っておくと、微生物が水田に沢山いることで、有機物を分解し、肥沃土壌となり、農薬と化学肥料を使わずにお米の生産ができるということでした。農家に衝撃が走りました。1998年秋から「水田冬期湛水」を始める農家が現れました。2003年、農水省の支援事業を活用して「ふゆみずたんぼ」と命名して、自治体として普及することを決定しました。

農業とマガンの新たな関係、対立から共生への道づくりができました。蕪栗沼と周辺水田では、農家、NGO、大崎市が協働して付加価値のあるお米（マガンに選ばれた田んぼの安心・安全）を生み出すとともに、マガンの生息地も守ることができるようになりました。周辺水田を「冬期湛水」することで、マガンのねぐらを分散と採食地の拡大を行い、水質の改善と越冬環境の創出の取り組みが広がり、蕪栗沼164ha、周辺水田259haをラムサール条約に登録することができました。水田の名前がついた世界で初めてのラムサール条約湿地です。

蕪栗沼と周辺水田では生きもの頼り、寄り添った農業をしています。カエルが害虫を食べ、イトミミズが雑草の発生を抑制してくれます。他方で、冬期湛水には水利権の問題があります。そのため冬期湛水には雨水や雪解け水使います。この限られた水を漏れなく、効率的に利用するため塩ビのパイプを毎年秋に水路に設置し、春にはずす手間がかかっていました。今、環境配慮型ほ場の整備事業が計画されており、水利権を取得し、安定的に冬期湛水ができるようになると思います。そうすれば、この塩ビのパイプの作業を行わなくて済むようになります。

3. 企業との連携など

地元の酒蔵「一ノ蔵」さんは、ふゆみずたんぼのササニシキを仕込み米として使用してくれています。また、大崎市の「ふつつつ食堂」でも販売するなど、農家が他所に出てお米を売るようになってきました。この間は、ドイツの有機農産物フェアに行き、PRを行って来ました。また、ふゆみずたんぼ米は佐渡のトキ米や豊岡のコウノトリ米とブランド化の連携をしています。

4. まとめ

マガンなんて害鳥だと言っていた農家が、今ではマガンの個体数を数えて調査するようになりました。農家のマインドが環境寄りになってきました。

蕪栗沼と周辺水田では、多様な主体による資源の多面的活用を行っています。以前は、葦が生え放題でした。大雨があると葦が倒れます。倒れたままの葦に砂が乗ると蕪栗沼は陸地化してしまいます。この葦を地元のNPOがペレット化し、燃料として販売を開始しました。とはいえ、ペレットストーブが普及していません。しかし、新しい大崎市民病院のペレットボイラーで利用してもらえることとなり、葦の活用ができるようになりました。

10年かけてなんとかここまで来ました。地元の人に理解してもらうこと、仲間をつくって

いくことが大切です。蕪栗沼と周辺水田にはカムチャッカ半島から4000キロの旅をしたマガンたちがやってきます。このマガンに選ばれた地であるという思いとともに、自然環境を守るだけでなく、かしこく活用していきます。

以上